

広報のチカラ



広報のとは能登町誕生以来、石川県広報コンクールで8年連続の最優秀賞を受賞し、全国コンクールでも6回の入選を果たしている。なぜ高い評価を得ているのか。今月は「広報」をテーマに、広報紙制作の内側、その「こだわり」を紹介してみたい。

広報のチカラ でできるまで



読まれる広報紙へ

能登町民を対象に、能登町が発行する広報紙「広報のと」。毎月1回、町会長・区長さんを通じて各世帯に届けられる情報誌には、行政からお知らせはもちろん、特集やニュース、イベントのフォトリポートなど能登町の話題が詰まっている。

現在、石川県や全国の広報コンクールで高い評価を得て

いる広報のとも、最初から大きな注目を集めていたわけではなかった。

広報のともが、能登町合併当初から目標としていることは、「手に取ってもらい読まれる広報紙であること。「読まれない広報紙は税金の無駄」と言えるからだ。

そのためにまず、全ての編集作業を広報担当がパソコンで行うDTP（Desk・Top・Publishing＝机上編集）を導入。これにより、年間

100万円以上の印刷経費削減とイメージどおりの紙面が編集できる環境を構築した。

次に中身。紙面を充実するには、▽目を引く写真▽読みたくなるキャッチコピー▽見やすいレイアウト▽読みやすくて分かりやすい文章―などの技術が要求される。

参考書は、全国トップレベルの広報紙や雑誌。一流のお手本をまねることから、多くのことを学んだ。「学ばず」の語源は「真似ぶ」。

まねをしながら、広報の独自のスタイルが出来上がっていった。

細部までこだわる

広報のとの評価の一つに「写真」がある。広報紙を手にとってもらうためには広報紙の「顔」とも言える表紙写真には特に重要。思わず手に取り、ページをめくってしまうような表紙が理想だ。

ページを開いて最初に目に飛び込むのも写真。ここで視線を止められるような写真があれば良い。

しかし、写真だけで全てを伝えることは不可能。一番のメッセージは本文の中にある。写真やデザインは、本文を読んでもらうためのものとも言える。

「神は細部に宿る」という言葉がある。お知らせ記事などの細かい所までしっかり作り込むことが、広報紙全体のクオリティを高めることにつながるため、1ページ、1文字を大切に編集している。

広報紙が刷り上がるまでの1カ月

【月初め】
月末に納品した広報紙をほかの回覧や配布物と一緒に町会長・区長さん宅に届けます。

【10日ごろまで】
各課からの原稿を取りまとめます。
特集の企画をまとめ、おまかなレイアウトを決めます。

【20日ごろまで】
特集記事や行事の取材と編集作業を進めます。

【25日ごろ】
最終原稿を取材先や各課に確認・校正してもらいます。校正後、印刷会社に印刷データを送付。

【月末まで】
印刷会社では製版・印刷・製本・仕分けの工程。
町外発送用の封筒やラベルを準備します。

【月末】
印刷会社から各庁舎ごとに納品。封筒詰め作業。

特集記事に 込める思い

特集記事、連載記事、行政のお知らせ記事など、広報紙の記事にはいろいろな形がある。中でも力を入れるのは特集記事。読みたくなる特集や行動につながる特集を目指している。

特集のメリット

なぜ広報紙に特集が必要なのだろうか。

雑誌のほとんどは、毎月特集を組んで読者の心をつかもうとしている。広報紙も同じ。

特集のメリット。一つは、テーマを深く掘り下げることで、より伝わりやすくなること。一つはテーマに関係する町民を取材して掲載することで、広報紙の制作が行政から

の一方通行ではなく、町民との共同作業になること。

広報紙は行政だけのものではなく、町民と一緒に作るもの。できるだけ多くの町民が紙面を飾るような広報紙が理想だ。

「企画」と「取材」

特集の出来を左右するのは「企画」。最初にテーマを決め、その特集で何を伝えたいのかを決める。伝えるために誰を取材し、展開をどうするか。特集タイトルやまとめの

言葉、デザインを考え、特集のイメージを作り上げる。

企画がまとまれば「取材」。話を聞かせてくれることに感謝しながら、その人が一番伝えたいことは何なのかを表情やしぐさ、言葉で感じる。うれしい話は一緒に喜び、悲しい話は一緒に涙する。「敬意」と「感謝」を忘れず、文章にまとめる。

特集を作っただけでは価値

あるものとは言えない。伝えたいメッセージがしっかりと伝わったり、読んだ人の行動に結びついて初めて、価値ある特集になる。

広報コンクールで受賞しても広報紙の価値は上がらない。それだけで地域が活性化するわけではないからだ。町民の意識が変わり、行動に結びついた特集が、広報紙の本当の価値になる。

広報のとで特集した主なもの

掲載月	テーマ	タイトル	企画意図
H17.11	猿鬼伝説	猿鬼に会いに行く	健康大会を機に柳田村の伝説を能登町として再度掘り起こす。
H18.7	ブルーベリー	青い宝石	ブルーベリー栽培農家を応援し、増やしていく。
H18.12	いしり	いしり物語	伝統の味をもう一度見直し、いしりの里づくりを考える。
H19.5	能登半島地震	検証能登半島地震	被害状況、被災支援のほか、防災への備えについて特集。
H19.12	テニス	百年目のLOVE ALL	能登町はテニスの町。合併後の新しいテニスの町を考える。
H20.5	文化財	文化財見聞録	町の文化財を紹介。保護の現状や課題も。
H20.11	消防団	最強の証	三波分団を訓練から全国大会まで密着。
H20.12	地域医療	生命の砦	公立宇出津総合病院を中心として、地域医療を守り育てるにはどうすればよいか。
H21.6	クロマルハナバチ	産声を上げた救済種	全国唯一のクロマルハナバチ生産施設が誕生。その価値や今後の展望は。
H21.11	飛行機	空	奥能登初のパイロット大場飛行士の郷土訪問飛行を誇りに活動する秋吉公民館。
H21.12	能登杜氏	魂の一滴	能登杜氏の酒造りにかける思いや杜氏組合の課題、杜氏の里のまちづくりを考える。
H22.6	のとキリシマツツジ	情熱の「赤」	NPO法人の活動から、のとキリシマの価値、守り育てることの大切さを訴える。
H22.7	鉢伏山	鉢伏山	かつて村が守ったブナ林が、エコツアーの舞台として注目される。その可能性を探る。
H22.11	合鹿椀	合鹿椀	謎に包まれた古椀・合鹿椀。その歴史と価値、復元・復興に向けた新たな取り組みを紹介。
H22.12	春蘭の里	上を向いて歩こう	里山を生かした農家民宿群「春蘭の里」の取り組みを紹介。限界集落と呼ばれる地域の生き残りをかけた活動に里山再生、活用のヒントを探る。
H23.5	赤崎いちご	イチゴの香り	全国的にも珍しい露地栽培のイチゴ園。農家、加工業者、行政の思いを取材。
H23.6	桜	天狗平の御所桜	県内2位のエドヒガンを守ろうと地域が保存会を立ち上げた。その思いと、専門家への取材。
H23.7	ケロン村	ケロンの小さな村	耕作放棄地を活用し、小規模農家の可能性を探る取り組みを取材。米粉を使つての6次産業、里山保全につなげる。
H23.9	筋ジストロフィー	Quality of Life	筋ジストロフィーと闘う詩人・四方健二さんの詩、生き方、家族や友人などを通して、命の質、人生の質について考える。
H23.11	防災	命の防波堤	東日本大震災の教訓を能登生かすためにはどうすれば良いか。防災教育の大切さも訴える。
H24.11	凧揚げ	能登の風に吹かれて	20年以上続く凧揚げ大会。その価値、魅力、課題を考える。
H24.12	世界農業遺産	能登イズム	世界農業遺産に認定された「能登の里山里海」。能登の暮らしの何が認められたのか。能登に生きる私たちはどうすれば良いのか考える。



Interview
ケロンの小さな村
じょうり
上乘秀雄さん
(宇出津)
平成23年7月号で特集

私が広報紙に特集された時期は、自分の描いた夢を今後どのように形にしていくか、もやもやしている時期でした。そんな時に特集で簡潔にまとめてもらって、改めて「自分の原点」を確認することができました。反響も大きく、1年以上経過した今でも「広報で見た」と言って訪れてくれる人がいます。

特集がきっかけでマスコミの取材が来たり、お客さんから激励を受けたり、活動の幅が広がりました。波及効果は本当に大きかったです。特に能登町内の皆さんに認識してもらい、広報紙の存在感を改めて感じました。

能登には頑張っている人がたくさんいますが、単なる紹介記事では人の思いや願いは表面に出ません。今後も特集を続けているいろいろな人に光を当て、「人の思いを伝える広報紙」であり続けてほしいと願っています。

広報のトへ メッセージ

情報を伝達する紙媒体の一つとして、広報の
とはどれだけの価値があるのだろうか。
広報のトを良く知る新聞記者、日本一の広報
担当者からメッセージをもらった。



中平雄大 (なかひら・ゆうだい)

1982年名古屋市生まれ。2005年、立命館大卒業後に中日新聞社入社。静岡、岐阜の勤務を経て09年8月～12年7月まで北陸中日新聞能登通信部に赴任。スローライフな記者生活を送る。現在は三重県の伊勢支局勤務。昨年12月に生まれた次女と3歳の長女、妻の4人暮らし。

「悔しい」

毎月届く「広報のト」を開くたびに、そう思った。一つのテーマを丹念に取材した特集、人物の核心に迫るインタビュー、能登の季節や人々の一瞬の表情を捉えた美しい写真…。書店に並ぶ雑誌と遜色ない完成度。新聞と広報紙とは、さまざまな部分で性質は異なるものの、同じ取材者としては重厚な紙面に「負けてられない」との思いを抱かざるを得なかった。

実際の取材で、担当者から思いを聞いた。「行政の広報紙」という立場を逸脱することなく、住民にとって「読んで良かった」「ためになった」と感じてもらう。そんな情熱を一住民としても紙面から感じることができた。

い。東日本大震災の発生直後、テレビやラジオも使えない避難所などでは新聞、特に地域の情報が詳細に書かれた地元紙の役割が再確認された。一方、被災地で発行する新聞の中には「これまで十分な防災の啓発を紙面でしてこなかった」と自省もしているという。

の一つの切り口だった。今後も毎年のように形を変えて掲載し、啓発してほしい。転勤で能登を離れたが、たまに思い出している。「へえ、ネットで読んでいい。「へえ、こんな人がいたんだ」「あの人はもうネタ切れか」。そんなことを心でつぶやきながら、能登ファンの一人として陰ながら応援している。

これからの広報紙に求められるもの

今後の広報紙には、行政だけでなく、住民に有益な情報を積極的に提供することを期待したい。

これから全国の行政広報紙をリードする存在であり続け、新聞の良きライバルであってほしい。



畠山 浩 (はたけやま・こう)

岩手県一関市市政情報課広聴広報係長。1999年から旧藤沢町の広報を担当。2011年の市町合併で一関市の広報担当に。全国広報コンクールで内閣総理大臣賞2回、総務大臣賞2回、読売新聞社賞5回など入選12回。



畠山さんが12年以上手掛けた「まちの総合情報誌 Fujisawa」は、全国の広報担当者に大きな影響を与えた。「広報のト」にとって最高の教科書であり、最大の目標だった。

全国

国や石川県の広報コンクールで素晴らしい評価をいただいているNOTO+は、言うまでもなく能登町の「宝」です。

でも、コンクルールの成績以上に評価されるべきことはその本質です。コンクールで高い評価を得た広報誌が、必ずしも良い広報誌であるとは言えないからです。広報誌の価値は読者、つまり能登に暮らし、能登に生きる皆さんが決めることであり、能登を知ら

ない審査員が決めることではありません。

NOTO+を生み出す原動力

良い広報誌の基準は、住民に愛される広報誌、住民の役に立つ広報誌、住民から必要とされる広報誌です。全国には自治体の数だけ広報誌が存在し、いずれも行政情報や地域の話題を報じています。しかし、住民に幸せを与える「幸

報」、地域発展に貢献する「光報」、古里に光を与える「光報」はいくつもあります。

NOTO+が素晴らしいのは、能登のまちづくりや皆さんの住民活動が素晴らしいことでもありません。なぜなら、広報誌に掲載される情報は、能登のまちづくりであり、皆さんの姿そのものであるからです。住民の幸せを考えたまちづくり、地域発展に貢献する住民活動、そして光り輝く古里こそ、NOTO+を生み

出す原動力です。

また読みたくなる 日本一の広報誌

NOTO+は、企画、文章、写真、レイアウトなど、どれをとっても行政広報誌の域を超える最高水準の広報誌です。しかも、毎号高いレベルで作られています。この「毎号」が、他の自治体ではまねできないNOTO+のすごさです。使命感に燃え、情熱を

注ぎ続ける担当者には頭が下がります。

行くとき幸せになれる店があります。お客さんが惚れ込むのは、「いい店+α」があるからです。このプラスαがあるか否かが、「いい店」と「また行きたくなる店」の境界です。広報誌も同様です。NOTO+は、「また読みたくなる」プラスαがたくさん詰まった日本一の広報誌です。これを毎号手にする能登の皆さんがうらやましいです。

広報のとなを 声で届ける

音訳ボランティア

河村喜久子さん（宇出津）



視覚障害者など、広報紙を読むことが困難な人たちに、音の情報として伝える音訳。今回、音訳ボランティアとして活動する河村喜久子さんに話を伺った。

言葉にして伝える作業だ。

『このままでは失明の可能性があります。すぐに大きな病院で手術が必要です』

当時、町内で音訳ボランティアをする人は一人もおらず、社会福祉協議会からも『ぜひやってください。機材の貸し出しなど応援します』という連絡を受けた。

平成18年、河村さんは左目の網膜に穴があく黄斑円孔という病名を医師から告げられた。手術は無事に成功。術後1カ月は、眼帯をしたまま不自由な姿勢での入院生活を強いられた。

河村さんは野々市の音訳テープを取り寄せ、輪島市の音訳ボランティアグループの勉強会に参加した。その後、紹介されたNHK朗読講座を通信教育で6カ月受講。平成19年4月号から本格的な音訳活動を始めた。

「眼帯を取った瞬間、目が見えることに感動しました。そして、光がない人はどんな思いなのだろうと考えるようになりまして」と河村さんは当時を振り返る。

「ラジオだけが情報源だった入院中に感じたことは、目が見えて声を聞くことと、見えなくて聞くことに大きな違いがあるということです」

そんな思いを持ったまま、読み聞かせボランティアの活動を再開した河村さんに、友人から声が掛かった。

『知り合いが野々市で広報を音訳するボランティアとしてりんけど、河村さんの声は絶対音訳に向いとるし、やってみんけ』

「広報のとは写真が特に多いので苦労しますが、私は『写真も言葉』だと思っています。何十枚も撮影した中から、その一枚を掲載した意図まで、イメージできるように伝えることが音訳の役目です」

音訳の作業には3日間。広報紙を3回は読み込み、120分のカセットテープにギリギリまで吹き込む。

「音訳は自分を磨かなければできません。自分のためにも、できるだけ続けていきたいと思っています。自分のささいな行動を待ってくれる人がいると思うと手は抜けません」と話す河村さんも広報紙を楽しみにしているという。

「これからも、思わず手に取るような読みやすい広報紙であってほしいですね」

毎月、毎号、広報紙を音訳する人がいて、それを聞く人がいる。

『それでは来月、またお耳にかかりましょう』

河村さんは今月も、広報のとなを声で届けてくれる。

広報紙にしかできないことがあり、
広報紙だからできることがある。

広報紙なのにできることもあれば、
広報紙としてやるべきこともある。

NOTO^{プラス}、広報のとなは、
これからも

一番身近な情報誌として

町と人の『現在』を、『未来』に伝えていきたい。

